

エゼキエル書43章1－5節 「神殿を愛される主」

1A 栄光の宿る住まい

- 1B エデンの園
- 2B 幕屋と神殿
- 3B 主ご自身
- 4B 御国の神殿
- 5B 新しいエルサレム

2A 聖霊の悲しみ

- 1B 偶像礼拝
- 2B 悪意
- 3B 初めの愛

3A ねたむほどに霊を愛される主

- 1B 聖霊の宿る宮
- 2B 栄光の望み

本文

私たちの聖書通読の学びは、エゼキエル書の終わりになってきています。前回、39 章まで読みました。午後礼拝で、40 章から 43 章までを読みたいと思います。40 章から、主がイスラエルに対して回復の御業を行われませんが、最も大事な回復、それは神殿の回復です。まず、本文を読みましょう。「**1 彼は私を東向きの門に連れて行った。2 すると、イスラエルの神の栄光が東のほうから現われた。その音は大水のとどろきのものであって、地はその栄光で輝いた。3 私が見た幻の様子は、私がかつてこの町を滅ぼすために来たときに見た幻のようであり、またその幻は、かつて私がケバル川のほとりで見た幻のようでもあった。それで、私はひれ伏した。4 主の栄光が東向きの門を通して宮にはいって来た。5 霊は私を引き上げ、私を内庭に連れて行った。なんと、主の栄光は神殿に満ちていた。**」

エゼキエル書の最も中心的なテーマとなっているのは、主の栄光であります。これまで出て来た最も多い言い回しは、「わたしが、主であることを知ろう」というものでした。主なる方が、確かに主であることを知る。つまり、神の栄光を見るということです。栄光というのは、元々は「重い」ことを意味しますが、ちょうど引力の法則によって太陽に光が集まっているように、主ご自身にその注目が集まることを意味します。私たちは普段は目に見えない神について、この方が主であることを意識しません。自分たちで事を行なっていると勘違いしています。しかし、全ては神が行なっておられるのです。ただ神だけの世界なのだということを知らせるため、「わたしが、主であることを知ろう」という出来事を、何度もお見せになるのです。

祭司であるエゼキエルに対して、主ご自身が、御座とその回りにいるケルビムの幻をお見せになりました。1章にありました。そして10章において、神殿から神の栄光が去っていったことを覚えているでしょうか？エゼキエルが、離散のバビロンの地から引き連れて行かれて、神殿の中に導かれました。するとそこには、忌まわしい偶像が据えられていて、長老たちが拝み、女たちも拝み、そして祭司たちが太陽のほうを向いてひれ伏していました。それで、主の栄光が神殿の聖所から立ち上り、徐々に、東の門へと移り、そしてついに、そこから出てって、オリーブ山に留まって、それからどこかにいなくなってしまったところを読みました。その建物はしばらく残っていましたが、主の栄光がそこから離れてしまった状態です。

しかし、主は神殿をバビロンによって破壊せしめてから、回復の預言をエゼキエルに任せられます。初めは新たな牧者を、主ご自身の僕が王として立てられること。次に、イスラエルの地の回復、国の回復。そして、安全保障の回復の約束を与えられました。そして主は、その回復せしめたイスラエルの中に、神殿を回復させます。エゼキエルを、その将来の神の国における神殿の中身を御使いによって案内されます。そして、内部を彼が見た後で、ここにあるように主の栄光が東から入って来たのです。かつて見た時の幻、とありますが、そうです東向きの門から出て行ってしまった栄光が、再び同じ東向きの門から入って来たのです。再臨のイエス様は、オリーブ山から天に昇られて、それで神の栄光が去り、後で神殿はローマによって破壊されました。けれども、同じようにイエス様はオリーブ山に足を降ろされ、オリーブ山は南北に別れ、地殻変動によってエルサレムは非常に高くなり、そこに、主は神殿を建てられます。そして、その東から入られるのです。

1A 栄光の宿る住まい

神は、遠くにいて、そこから人を支配することを望んでおられません。主が天におられるから、私たちから遠く離れていて、そこから手を伸ばして支配しているということではありません。しばしば、何か不条理なこと、苦しいことなどが起こると、神が何かを計画していて、自分は独りで苦しんでいるように感じる場合があります。いいえ、主は目の前におられるんですね。

1B エデンの園

天と地を造られた神は、私たちと共に住みたいと願われています。神が、ご自分の造られた、ご自分の形に似せた人間と、同じ所にいたいと願われています。初めに主が造られたのは、エデンの園です。そこにアダムを置き、アダムから女、エバを造られました。「創世 3:8 そよ風の吹くころ、彼らは園を歩き回られる神である主の声を聞いた。」とあります。主は、そこに住まわれて、彼らと共に過ごしたいと願われていました。けれども、彼らが罪を犯したので、そこから出て行かないといけなくなりました。こうあります。「3:24 こうして、神は人を追放して、いのちの木への道を守るために、エデンの園の東に、ケルビムと輪を描いて回る炎の剣を置かれた。」そうです、エデンの園そのものが、主がおられるところでそこに天使ケルビムがいました。

2B 幕屋と神殿

そして主は、イスラエルの民を選ばれます。エジプトから彼らを連れ出して、シナイ山の麓で造られたのが会見の天幕です。主はそこで、ご自身が住むようにされ、そして栄光がそこに満ちたとあります。「出エジプト 40:34-35 そのとき、雲は会見の天幕をおおい、主の栄光が幕屋に満ちた。モーセは会見の天幕にはいることができなかった。雲がその上にとどまり、主の栄光が幕屋に満ちていたからである。」幕屋の中心は、契約の箱とその上にある贖いの蓋でした。贖いの蓋には、ケルビムが彫られていました。そしてケルビムの間から、わたしは語ると主は言われました。そして、イスラエルの民はこの幕屋を真ん中にして宿営をするように命じられていました。彼らの真ん中に、神がおられることを神は示されたかったのです。

そして、イスラエルの民が約束の地に入って、ダビデそしてソロモンの時代に入って、定住する、幕屋と違って移動することなく、留まっているところとして神はエルサレムを選ばれました。ソロモンが七年かけて神殿を建て、そして神殿を捧げた時に栄光の雲が満ちました。「1列王 8:11 祭司たちは、その雲にさえぎられ、そこに立って仕えることができなかった。主の栄光が主の宮に満ちたからである。」このようにして、主がやはりイスラエルの民の中に住み、聖所からご自分の栄光を現したいと願っておられたのです。そしてもちろん、この神の願いをイスラエルの民がないがしろにし、それで栄光がそこから去り、神殿自体も破壊されたということです。

けれども主は、七十年後にエルサレムに戻ることができることとエレミヤを通して約束しておられました。そして、彼らは帰還した後に神殿を再建します。エズラ記 1 章 2-4 節に、神殿の建設を布告するクロス王の言葉が出て来ます。「エズラ 1:2-3 ペルシヤの王クロスは言う。『天の神、主は、地のすべての王国を私に賜わった。この方はユダにあるエルサレムに、ご自分のために宮を建てることを私にゆだねられた。あなたがた、すべて主の民に属する者はだれでも、その神がその者とともにおられるように。』」そして、ゼルバベルが建てて、その後、ヘロデ時代に大改修を行ないました。このようにして、主は何とかしてご自分の栄光もって人々の間に住みたいと願われています。

3B 主ご自身

そして、時が満ちました。主はご自分の栄光を、建物の中にではなく、イエス・キリストご本人の中に現すことにされたのです。「ヨハネ 1:14 ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。」初めはエデンの園、それから幕屋、そして建物の神殿、それから、イエス・キリストご自身であります。ここの「住まわれた」という言葉は直訳では、「天幕を張った」となっています。つまり、主の幕屋、また神殿は、実は主ご自身の体そのものを表していたということになります。祭壇は、主が十字架に付けられ、神の罰を受けられた姿。聖所に入って、供えのパンは主ご自身が「わたしが命のパンである」と言われた、主の命。燭台の灯は、「わたしは世の光」と言われた、その光。そして正面の香壇は、神の前への祈りを表します。イエス様は父なる神に、私たちのために執り成しの祈りを捧げられました。そして、至聖所の契約の箱と贖いの蓋は、主ご自身

が流された血による贖いです。

神はキリストの中に、ご自分の栄光の全てを現しておられます。「ヘブル 1:3 御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現われであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。また、罪のきよめを成し遂げて、すぐれて高い所の大能者の右の座に着かれました。」この方にこそ、父なる神の住まわれる栄光がありました。イエス様は、エルサレムで宮清めをされた時に、ユダヤ人指導者たちに、「この神殿をこわしてみなさい。わたしは、三日でそれを建てよう。(ヨハネ 2:19)」と言われました。主ご自身の体のことを指していたのです。この方の中にいるということは、父なる神の栄光を見ることができます。イエス様は言われました。「だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。(ヨハネ 14:23)」主が住んでくださるのです。主が私たちのうちに住まわれると、父なる神も住んでおられます。私たちがイエス様を愛し、その言葉を守っていれば、その神秘的なご臨在を味わうことができるのです。

4B 御国の神殿

そして、主は復活し、昇天されました。そして天の御座におられます。そこから、地上に戻って来られます。そして、紀元 70 年にローマによって滅ぼされた神殿の置かれていたエルサレムに、主はご自身で神殿を建てられるのです。それが、今読んでいる神の国における神殿です。

5B 新しいエルサレム

そしてそれが千年のこと続き、最後の審判があり、新しい天と新しい地が造られます。天から都が降りてきます。新しいエルサレムです。そこには神殿がないと書かれています。なぜか？「それは万物の支配者であり、神であられる主と、小羊とが都の神殿だからである。(黙示 21:22)」イエス様が、私たちがご自身と父なる神の中にあるようにすると言われたその奥義が、目に見える形でそのまま実現するのです。主ご自身が神殿であり、その中に私たちが生きようになります。彼らは、「神の御顔を仰ぎ見る。(22:4)」とあります。

2A 聖霊の悲しみ

いかがでしょうか？主はこれほどまでに、私たちの中に、私たちの間に住まわれたいと願っておられます。天と地も神を収めることのできないほど、偉大な方なのに、それでもこのような小さき者たちの間に住まわれたいと願われています。使徒たちは、私たち信者こそが、聖霊が住まわれることによって神の宮になっていると教えます。聖霊の働きが、私たちの間に、教会において生き生きと存在しています。

1B 偶像礼拝

そこで、主がご自分の栄光の臨在を留まらせることが難しくさせる原因はいろいろあります。その主な理由は、エゼキエル書 8-10 章に拠れば偶像礼拝です。偶像礼拝というのは、主なる神以

外のものを神々とする事です。ただひとりの神と私たちは、夫婦関係と同じように、一対一の愛によって、その真実な愛に基づく契約によって成り立っています。そこに偶像礼拝、また不品行や貪りなどを入れるのであれば、それは言わば、「自分の寝台に、自分の妻ではない者を入れる」つまり、不倫状態を作り出しているものです。

主は妬む神です。このことは到底受け入れられないと考えます。コリントにある教会では、なんと遊女、売春をしている者たちがいました。「1コリント 6:15-17 あなたがたのからだはキリストのからだの一部であることを、知らないのですか。キリストのからだを取って遊女のからだとするのですか。そんなことは絶対に許されません。遊女と交われれば、一つからだになることを知らないのですか。「ふたりの者は一心同体となる。」と言われていたからです。しかし、主と交われれば、一つ霊となるのです。」つまり、自分の寝台にその遊女とキリストを一つにすることなのだ、と言っているのです。そんなことは、絶対にあってはいけません。

2B 悪意

そして、私たちの間に神の栄光を見せなくさせてしまうのは、悪意です。「エペソ 4:30-32 神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです。無慈悲、憤り、怒り、叫び、そしりなどを、いっさいの悪意とともに、みな捨て去りなさい。お互いに親切にし、心の優しい人となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさい。」思えば、サウルから聖霊が離れ、悪霊に悩まされ、彼はダビデをねたみ、激しい殺意にかられました。そしてダビデに殺意を抱く生活を歩んでいきますが、苦みや妬み、憤り、そういったものと聖霊は共存できないのだということが分かります。

3B 初めの愛

そして私たちから、神の栄光の臨在が去ってってしまうのは、意外にも、「真面目な教会」にもやって来ます。エペソにある教会に対して、イエス様は、「わたしは、あなたの行ないとあなたの労苦と忍耐を知っている。」と言われて、彼らがしっかりイエス様の教えを守っている教会であることをほめました。ところが、「悔い改めることをしないならば、わたしは、あなたのところに行って、あなたの燭台をその置かれた所から取り外してしまおう。(2:5)」と言われました。この燭台は、イエス様がおられること、その臨在の光を意味しています。それを取り除くと言われているのです。なんで、しっかりやっている教会なのに？主によれば、「あなたは初めの愛から離れてしまった。(4節)」ということなのです。正しさを追求して、神に愛され、神を愛することなのだということを忘れてしまった時、こうなってしまいます。

3A ねたむほどに霊を愛される主

ですから、私たちは各人が自問しないといけないのです。「自分には、神のご臨在があるか？主の栄光が間近に見えるか？」ということです。もし、偶像礼拝や不品行や貪りがあれば、主のご臨在は離れていることでしょう。そして、苦みや憤り、怒りなどがあつたら、それもまた聖霊を悲し

ませているのであり、神の栄光が見えなくさせられているでしょう。また、自分が正しい、正しいと言いつけたら、主の栄光は見えません。けれども主は、ここにある幻にあるように、それでも情熱をもって主は、私たちのところに栄光をもって戻ってきてくださるのです。「神は、私たちのうちに住まわせた御霊を、ねたむほどに慕っておられる。(ヤコブ 4:5)」妬むほどの慕っておられるのです。

1B 聖霊の宿る宮

「1コリント 6:19-20 あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。」私たちは、もはや自分の体は自分のものではない、と言っています。主が妬むような愛を持っておられます。これは、わたしのものだと言われます。なぜなら、この体はイエス様の血をもって買い取られたからです。

そして、誰かがこの宮を害するならば、主は速やかに裁いてくださいます。「コリント 3:16-17 あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられることを知らないのですか。もし、だれかが神の神殿をこわすなら、神がその人を滅ぼされます。神の神殿は聖なるものだからです。あなたがたがその神殿です。」主が、私たちを、教会を滅ぼそうとするものがいれば、ご自分のものに触れていることになりまますから、主が滅ぼしてくださいます。主はこのようにして、聖霊の住まわれる宮を守ろうとされます。主は、彼らがあれだけ偶像礼拝をしてご自分を追い出してしまった所に戻って来られるように、私たちのところに熱情をもって、留まっています。

どうか、自分が神の栄光に陰を作ってしまったようなことがあれば、それを今、主の前に告白しましょう。主は、ご自身が神殿となってください、その肉体を幕屋としてくださって、血を流してくださいました。「ヘブル 10:19,20,22 私たちは、イエスの血によって、大胆にまことの聖所にはいることができるのです。イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのためにこの新しい生ける道を設けてくださったのです。…私たちは、心に血の注ぎを受けて邪悪な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われたのですから、全き信仰をもって、真心から神に近づこうではありませんか。」今、イエスの血の注ぎかけを、良心に受けて、神の栄光の臨在の中に入ることができるのです。みなさんは、すでにイエス様の血の注ぎかけを受けたでしょうか？ご自身の心の痛み、傷において、その傷を主が受けられたことを受け入れたでしょうか？

2B 栄光の望み

パウロは、このことを奥義であると話しました。「コロサイ 1:27 神は聖徒たちに、この奥義が異邦人の間にあつてどのように栄光に富んだものであるかを、知らせたいと思われたのです。この奥義とは、あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのことです。」キリストが中におられるということ、これこそが栄光の望みです。主の栄光にあやかることができる、「わたしこそが主であることを知ろう」という、エゼキエル書にある言葉を体験できる、恵みを受けています。